

聖書：Iサムエル30：1～31

説教題：必ず追いつくことができる

日時：2017年9月24日（夕拝）

今日の章でダビデとその部下はツィケラグに帰ります。このツィケラグは、27章6節でペリシテ人の領主の一人ガテの王アキシユがダビデたちに与えた町でした。なぜダビデはペリシテ人の町に住んでいたのでしょうか。27章以降を簡単に復習したいと思います。27章でダビデはサウルを恐れてペリシテの地へ逃れて行きました。これは主の命令によったとか、ダビデが主に祈って与えられた導きだったということは示唆されていません。これは信仰による選択ではなく、むしろダビデの自分の知恵に頼る歩みであったことが暗示されていました。ペリシテの国で滞在を許され、その王に認めてもらうためには、イスラエルの敵になったかのように振る舞わなければなりません。そこでダビデは実際には違う町々を攻撃したのに、戦利品をアキシユのところに持ち返って来ては、まるでイスラエルの南の町々を攻略したかのような報告をしていました。そして口封じのために、襲った町の住民は皆殺しにしていました。そんなダビデに大ピンチが訪れます。それはペリシテの国とイスラエルの国との戦いが始まったことです。アキシユはダビデに、「あなたは私と一緒に出陣してもらおうよ」と言います。ダビデはその命令を断ることができず、ついにペリシテ軍がアフЕКに集結した時、そのただ中に整列していました！イスラエルの王となるべき人が！です。しかし前回の29章で、まさかの導きが与えられました。ペリシテ人の他の領主たちが、ダビデと一緒に出陣するのは危険だ、とアキシユに警告したのです。この男と一緒に戦いに行かせないでくれ！彼を帰らせてくれ！いつ敵側に寝返るか分からない！と。こうしてダビデはイスラエルとの戦いに参加するという最悪の事態を免れることができたのです。ツィケラグに戻る時、ダビデの心はどんなに安堵し、救われたような気分になっていたことでしょうか。

ところがダビデがツィケラグに帰ってみると、恐ろしい状況が彼を待っていました。今日の30章がそのことを記しています。何とその町は何者かによって襲われ、火で焼き払われていました。そしてそこにいたはずの女たちも、子どもも大人も、一人もいなかった。ダビデとその部下の妻たち、息子たち、娘たちがみな連れ去られていたのです。家畜や財産もみな！です。ダビデたちはこの無残な町の様子を見、連れ去られた家族を思っただけで絶望し、声をあげて泣き、ついには泣く力さえもなくなります。おそらくこれまでの経験の中でも最も激しいショックをダビデはこの時、覚えたのではないのでしょうか。

そんな中、さらに最悪の展開が生じます。人々がダビデを打ち殺そう！と言い始めたのです。自分たちがこんな状況になったのはダビデのせいだ！ダビデが悪い！ダビデの言うことに従って来たから我々の息子たちや娘たちが奪われたんだ！彼を石打ちにしよう！と手に石を持ち始めたのです。人間とは自分勝手なものです。状況が悪くなると誰かのせいにせずにはいられない。自分たちをこれまで導いて来てくれたダビデに対してさえ、このような扱いをしようとする。このためにダビデは「非常に悩んだ」と記されています。これは自らの知恵に頼って歩んだダビデが行き着いた結果とも言えます。彼はこうしてもはや自分の力ではどうすることもできない状況、自分で自分を救い出すことが不可能な状況に陥ったのです。

その時でした。このダビデに大きな転換点が訪れます。同じ6節に「しかし、ダビデは彼の神、主によって奮い立った」と記されます。ダビデは、この絶望的な状況に至った時に、主なる神に頼ることへと追い立てられたのでしょうか。自分の知恵に頼って生きることの限界また愚かさを悟り、もはや主にすぎる以外にない！と導かれたのでしょうか。そういう意味で、このツイケラグの経験はダビデに対する主のショック療法のようなものだったと言えます。ダビデは愚かな歩みを重ねてここまで落ちてしまいました。これは彼のこれまでの歩みの刈り取りと言えます。しかし同時にこれは主がダビデをご自身へと招いてくださる恵みの時でもあったのです。ダビデはもう自分は主による以外に望みはない！と悟らされ、悔い改めをもって主に信頼することへと立ち返ります。そして主の約束に信頼し、「主によって奮い立つ」という本来の祝福に立ち戻ったのです。

7節でダビデは祭司エブヤタルに「エポデを持って来なさい」と言います。エポデが登場するのは久しぶりです。23章9節以来です。ダビデは主に伺います。このような姿勢はしばらく途絶えていたことです。ダビデは主に問います。「あの略奪隊を追うべきでしょうか。追いつけるでしょうか。」これに対して主は答えてくださいました。「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。」何という恵み深いお言葉でしょうか。これまでしばらく神を無視して歩んだダビデに対し、主は沈黙を持って答えられても良かった。しかし主は悔い改めをもって立ち返ったダビデに、あわれみをもって、このような導きをくださいました。まるでこの時を主ご自身が待っていてくださったかのようです。こうしてダビデは主との正しい関係に立たせていただき、主からの励ましの言葉を頂いて進んでいきます。

ダビデは600人の部下とともに出て行きます。ベソル川まで来た時、疲れて渡ることができない200人はそこに置き、残りの400人で前進します。その途中で一人のエジプト人を見つけました。彼は何らかの手がかりを与えてくれる人でしょうか。パンを食べさせ、水を飲ませ、その他の食べ物を与えて元気を回復した後に話を聞くと、何とツイケラグを攻略したアマレク人の奴隷の一人であることが判明します。アマレク人のところまで案内できるかと尋ねると、彼は「案内します。私の命を守ってくださるなら」と答えます。こうしてダビデは貴重な手掛かりを得ます。これは主との正しい関係に立ち返ったダビデに、主が与えてくださった摂理の導きと言えます。

そうしてついにアマレク人を見つけます。彼らは自分たちの大勝利を祝い、お祭り騒ぎをしている最中でした。ダビデたちは一気にこれを襲います。ラクダに乗って逃げた400人の若い者の他は一人も逃れおおせなかったとあります。この結果、ダビデはアマレク人が奪い取った物を全部取り戻しました。19節には、子どもも大人も、また息子娘たちも、分捕り物も何一つ失わなかったとあります。アマレク人は人々を奴隷として売るために、殺さずに生かしておいたのでしょう。それが幸いして、彼らを全部取り戻すことができたのです。これは主と正しい関係に立ち返ったダビデに対する主の大きなあわれみの導きと言えます。

21節以降には、その後の注目すべきエピソードが記されています。これは主との正しい関係を回復したダビデの霊的状态を示すものです。戦いを終え、ベソル川まで戻って来た時、そこにとどまっていた200人の者たちが迎えに出て来ました。その時、ダビデと一緒に戦いに行った者たちが口々にこう言ったと22節に記されています。「彼らはいっしょに行かなかったのだから、われわれが取り戻した分捕り物を、彼らに分けてやるわけにはいかない。ただ、めいめい自分の妻と子どもを連れて行くがよい。」ある意味で当然の言葉です。自分たちは命をかけてこれだけ苦労した。だから川のほとりにとどまって働かなかった者たちに祝福を同じように分けてやるわけにはいかない。働きに応じて、功績に応じて、報われるべきだ！と。確かにこれには誰も文句をつけられないでしょう。自分たちが戦いに勝つことができた助けはどこから来たのかに正しく目を上げないならば、です。これに対してダビデは言いました。23節：「ダビデは言った。『兄弟たちよ。主が私たちに賜った物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちが襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。』」ダビデはここで、これらの分

捕り物は主が与えてくださったものだと思います。これは我々の功績ではなく、主の功績であり、主のお恵みによることである。そうであるなら、我々が主からお恵みを頂いたように我々も他の人に対してそのようであればならないと。ここにダビデが今回の戦いにおいて、ただ主により頼み、主からの力を受けて勝利したということが示されています。それゆえ彼は主に栄光を帰し、主の恵みにあずかった者たちらしい歩みを命じたのです。I コリント 4 章 7 節：「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」 私たちは自分の今ある状態を、自分の力と自分の努力で勝ち取ったかのように考え、自分に栄光を帰し、自分を誇ろうとしますが、すべては主が恵みをもって与えてくださったものです。私たちはそのことを正しく認めて主に感謝をささげるべきですし、また主に感謝する人は、主が私にそうしてくださったように私も他の人に対してそうあるように（恵み深くあるように）と導かれるでしょう。このことはこの日以来、イスラエルのおきてとなったとあります。

さらに 20 節以降でダビデは、友人であるユダの長老たちに分捕り物のいくらかを送りました。最後の 31 節には、これらの町々はダビデとその部下がさまよい歩いたすべての場所の人々だったとあります。ダビデは主がくださった祝福をこのように人々と分け合ったのです。こうして主との正しい関係に立ち返ったダビデは、他の者たちにも主の祝福をもたらす者ともなったのです。

以上の I サムエル記 30 章に見るのは、ダビデの回復でしょう。27 章以来、彼はどんどん下降し、ついにこの章でツィケラグにおける災いに直面しました。もはや自分の力ではどうすることもできない、彼のこれまでの人生における最も辛い状況に遭遇しました。しかしこの章で私たちが見たのは、一旦主に立ち返ったなら、何とすぐに主の豊かな祝福が彼に回復されたかということではないでしょうか。彼はまず主に伺って、主のお答えを頂きました。その主の導きのもと、進んで行くと、家族を救い出すための貴重な手掛かりを与えられました。そして必ず追いつくことができるという約束のお言葉通り、失ったすべてのものを取り返すことができました。そして主への感謝に心満たされている者として、広い心で問題に対処し、周りの者たちに祝福を届ける主の通り良き管となりました。私たちも自分をダビデに重ねてみてどうでしょうか。主に立ち返る前のダビデのようであることはないでしょうか。人間的に色々努力し、画策してみるものの、どうもうまくいかない。だんだん状況は思わしくなくなり、声を上げて泣き、ついには

非常な悩みに落ちたダビデのようであることはないでしょうか。しかし主との正しい関係に立ち返るなら、主はこの章で見たような驚くほどのスピードをもって恵みの状態へと回復させてくださる。主は励ましのメッセージをもって答えてくださいます。上からの摂理の導きを与えてくださいます。失ってしまったと思った祝福を取り戻すことができるようにしてください。そして自分自身が祝されるばかりか、さらに周りの人々にも主の祝福を分かち合うことができる者としてくださる。私たちは主と自分の関係をもう一度考えたいと思います。もし主によらず、自分の知恵に頼って歩んでいたことを思うなら、「主によって奮い立つ」新しい歩みへ進みたいと思います。主は立ち返ったダビデに豊かな祝福を回復させてくださいました。私たちも主に立ち返り、主とともに歩むところに与えられる上からの新しい力と導きとにあずかって、主の奇しい恵みの道を歩ませていただく者でありたいと思います。